

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) Number 12

※動画で用いるスライドはPDFで動画下にリンクで貼り付けています

①上田紀行先生との対談

—文化人類学者としての上田先生がなぜ大学教育へ?—

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 学長・教授

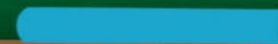
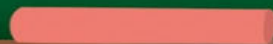
<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年准教授、2014年教授を経て、2019年4月より現在に至る。京都大学博士（教育学）。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画は溝上が個人的に作成・提供するものです



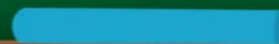
今回の企画 (Number12)

朝日新聞「理工系の教養改革はいま (上・中・下)」

(2022年1月12日・19日・26日)

「理工系の東京工業大学が、リベラルアーツの充実で志のある学生の育成に乗り出して約6年がたつ。学士・修士で学んだ第1期生の多くがこの春、社会へと巣立つ。東工大は何に取り組み、何が変わろうとしているのか。3回にわたって報告する」

(「上」の出だしより)



溝上のコメント（「下」の最後より）

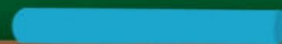
横浜の桐蔭学園で理事長を務める溝上慎一・元京大教授は東工大を高く評価する教育学者だ。「理工系最高峰で教養をしっかりと踏まえて、理工系トップ人材を育てる。このコンセプトは絶対に素晴らしい」と語る。

特に注目するのは、学生たちの人生の「生きる」というところに落とし込んでいることだという。「全員1年間留学」「数学必修」など、制度をいじるのは比較的簡単。そうした大学は数多くあるものの、東工大のようにどう社会に関わっていくのか、生きるのか、まで踏み込む大学はほぼないと指摘する。

90年代、全国的に専門重視となり、教養教育は軽視されていった。そして、近年、教養の重要性が再認識されるようになったものの、全国的にみれば、教養教育を大学4年間の中に位置づけ直すことさえ進んでいないという。

溝上氏は中央教育審議会の大学分科会で、制度・教育改革ワーキンググループにも関わった。

「課題は誰もどこも、東工大に追従していないこと。高等教育の研究者として、教育政策にかかわる者として、他大学に広げていくためのスキームを考えているところです。」



上田 紀行 先生のご紹介

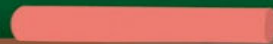
うえだ のりゆき

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院
教授・院長

文化人類学者

東京大学教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程修了。博士（医学）取得。

愛媛大学助教授、東京工業大学大学院社会理工学研究科准教授を経て、2012年同大学リベラルアーツセンター教授、2016年より現職。



それではご覧ください

ご視聴有難うございました

—To be continued—

チャンネル登録をお願いします

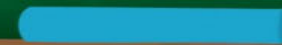
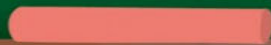
質問、コメントは個人メールで受け付けます。

E-mail mizokami@toin.ac.jp

- お名前、ご所属

※可能なら専門分野や教科、職位なども教えてください、回答の助けになります。
なお、動画内では個人のお名前等は出しません。

- 質問、コメント等



学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 学長・教授

1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年京都大学准教授、2014年教授を経て、2018年9月に学校法人桐蔭学園へ。2019年同理事長、2020年より現職。京都大学博士（教育学）

日本青年心理学会理事、大学教育学会理事、“*Journal of Adolescence*” Editorial Board委員、文部科学省高等教育局スキームD（座長）、中央教育審議会初等中等教育局臨時委員、総合教育政策局リカレント教育審査委員、大学・高校の外部評価・指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年・発達心理学・教育実践研究（自己・アイデンティティ形成、自己の分権化、学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション、人生100年時代のキャリア形成など）。著書に『自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる』（2008世界思想社、単著）、『現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ』（2010有斐閣選書、単著）、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014東信堂、単著）、『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』（2018東信堂、単著）、『学習とパーソナリティ—「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよね！」をどう見るか—』（2018東信堂、単著）、『高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題—』（2018学事出版、編著）など多数。

<http://smizok.net/>



著作紹介

溝上慎一 (2020). 『社会に生きる個性—自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー—』
(学びと成長の講話シリーズ3) 東信堂

第1章 自己と他者の観点から見る学びと成長

1. 人の発達において他者理解は自己理解に先立つ
3. 自己とは——他者との対峙を通して発現する一個存在
6. 講義—辺倒の授業における学習においてさえ他者は組み込まれている
7. 学習プロセスに他者を組み込む——ペア・グループワークはなぜ求められるのか
9. リフレクション（振り返り）はメタ認知を働かせた言語活動
10. 自己内対話と学習

第3章 エージェンシー

1. OECDの学習者のエージェンシー
3. バンデュラのエージェンシー論—四つの特徴
5. 自己肯定感を高めるのではなく、自己効力感（エージェンシー）を高めよ
6. 内発的動機づけ・自己決定理論——主体的な学習の第I～II層
7. 記憶の情報処理から見た学習—自己関連づけ・自己生成

第4章 教育雑考

2. 自分が生徒の時にはアクティブラーニングをしてこなかった。なぜ今の生徒にここまで求めるのか
3. 社会に生きる個性を育てる——教授パラダイムと学習パラダイムに関連づけて
4. 生徒はアクティブラーニングを熱心におこなうが、教師は成果としての手応えを感じない。そこで起こっていることは？
5. アクティブラーニングと評価

